景観とは“発見”するもの

今回の対談のお相手は、東北大学大学院工学科の五十嵐太郎教授である。建築批評家である五十嵐先生に、建築の視点から街の景観について話を聞いた。（構成：編集部）

髙橋　景観をどういった視点で見ると、街を面白く見ることができますか？

五十嵐　景観とは、「こういうのが良くて、こういうのが悪い」といったお手本に照らし合わせるよりも、“発見”するものではないかと思っています。そういうのが上手いのは一般の人たちよりも、写真家や映像作家やアーティストです。そういった人たちは「自分にはこういう風に世界が見えるんだ」ということを発見しているのだと思うのです。それらの作品が、多くの人に影響を与えるのであり、私もかなり影響を受けています。

例えば昨年12月に公開された映画「007スカイフォール」では、上海の街を凄くカッコ良く撮っています。ガラスにサインが反射して映っているところに格闘シーンがシルエットで映されたりして、この映画監督はかなり意識的にこの場所の風景を切り取っているなと思いました。

現在の上海は都市の中に高速道路の高架が通っていて、青いライティングが不思議な感じです。上海では90年代頃から高速道路の建設が進んでいて、初めてその風景を見たときはすごく未来的な風景だと思いました。そのとき“日本に来る外国人が首都高を見て未来的だと思うのは、この感覚なんじゃないかな”と思いました。

髙橋　なるほど。そういったことが五十嵐先生にとって“発見”することなのですね。では、先生から見て渋谷はどうですか？

五十嵐　109のシリンダーは建築物として存在感があります。ヒカリエは渋谷の都市環境を考えていて、建築的には頑張っています。それ以外はカッコイイとか綺麗というものはない。むしろ渋谷の特長は、すり鉢状の地形にあると思います。すり鉢状の地形の中にいろいろなものが複雑に入り組んでいるので、どんな建築物を建てようと、そうした風景の基盤となる部分は変わらないのかなと思います。

髙橋　景観について語るとき、看板や電柱は否定的に捉えられることが多く、建築にはあまり言及されません。建築が変われば景観も変わると思うのですがどうでしょうか？

五十嵐　本気でやれば建築で街の景観を変えることはできるのでしょうけれど、その努力と手間、覚悟を考えるとやはり難しいと思います。だから建築だけで特性が出なくてもいいと私は思います。

香港なんかは建物の両側から袖看板が出ていて、それを見ると香港に来たなという感じがします。建物自体は近代以降の鉄筋コンクリートで、特徴がある訳ではありません。逆に大阪の道頓堀だったら、建築家がクオリティの高いものを作っても、グリコのネオンなど周囲の雑多な繁華街に埋没してしまうでしょう。

景観を見直す、再評価するというなら、街をカッコ良く撮れる映像作家がいればいいと思います。ある街をプロモーションしようというときに、その街を舞台にした映像で魅せる映画があったら役立つと思います。クリエイターが新しいモノの見かたを提示すれば効果的です。香港だったら最初期のウォン・カーウァイの映画（「欲望の翼」1990年、「恋する惑星」1994年など）を見ると、街の映像がカッコ良くて実際に行ってみたくなります。東京に外国人観光客を誘致するなら、こういったことに投資するのもアリだと思うのですが、東京は映画の撮影にはなかなか使えないのです。

髙橋　景観をコントロールすることを考えるばかりでなく、クリエイターなどの視点を通して“発見”することも、都市の魅力を高めることになると。

五十嵐　そうです。もしも本当に優れた美意識を持っていて権限もある人が景観をコントロールするというのなら、やって見せてもらいたいですけどね。有名な都市計画家の伊藤滋さんなんかは、私が知る限りにおいては確固たる美意識を持っているとも思えない。私は彼のような景観論者の美意識が、そもそも信用できません。

東京は20世紀半ばに戦争で徹底的に破壊されて、その後はそれぞれの場所で好き勝手にやっていったことで今の姿があります。それは東京の歴史なので変えようがないのです。私は、景観をコントロールするよりも、今までにない視点で東京の見かたを提示してくれるようなクリエイターの作品に触れたいですね。

【取材協力】
東北大学大学院工学研究科
五十嵐太郎教授（博士（工学）、建築史・建築批評家）

広告景観研究所の髙橋芳文所長。